

# 横浜の河川環境を考へる

吉村伸一

## 一 はじめに

今年の夏のことである。横浜の源流域の話を上白根町のあるお百姓さんの所に聞きに行った。かつて、横浜では、いたる所で源氏ボタルが飛び交い、川の水は洗い水としてよく利用されてきたそうである。そんな話を伺っているとき、ふと真近に迫っている住宅を見やると「最近の人はすぐ田んぼを埋めて宅地にしてしまふけど、昔の人はここを田んぼにするのに大変な苦勞をしたんだらうになあ」とつぶやいたことは強く印象に残っている。

横浜は港と運河の街である。埋立てによって形成された都心部には数多くの運河が掘られ、朝夕、ポンポン船やダルマ船が行き交い、港の活気と下町の風情にあふれていたという。そんな運河も、今埋立てられたり、高速道路に空をささぎられたりしている。運河だけではない。市内河川のかなりがドブ川として見捨てられ、暗渠化がすすんでいる。もう、横浜の川は、排水路としてしか、市民生活とかわりがなくなってしまうたのだらうか。

画を破棄して、伝統的文化の柱にクリークを位置づけ水郷の町柳川の再生に努めている。全国的にも中島川（長崎）の石橋群を守る運動、小樽運河を守る運動など数多くの市民運動があり、日野市の浅川親水計画、草加市の綾瀬川再生計画など、行政側のとりくみも数多く見られるようになっていく。

自然の川であれ、人工的に掘られた川であれ、それぞれ長い歴史があり、市民生活と深いかわりがあったはずである。今、大都市横浜の川を、もう一度見直すときがきたのではないだらうか。

## 二 他都市の川のいくつかを歩いて

横浜の河川改修といえは、護岸はコンクリートブロックか鉄筋コンクリート。高さが一・二メートルもあるネットフェンス。断面は幅や深さの差こそあれ、ほとんど同じ。自然の流れが創り出した瀬や淵など関係なく、計画断面に忠実に底を平らに仕上げる。

- 一 はじめに
- 二 他都市の川のいくつかを歩いて
- 三 横浜の川—リバースケープ
- 四 横浜の川の再生に向けて
- 五 河川環境向上のための具体的検討課題
- 六 おわりに

しかし、ここ数年、他都市の川のいくつかを歩いてみて、当り前のことであるかもしれないが、都市河川といっても実にいろんな川があるものだと感心しているのである。

横浜の川の再生の手がかりという意味で、私が歩いた他都市の川のいくつかを紹介してみたい。

### ① 山口県のホタル工法

山口県は、源氏ボタルの生息地として有名で、三水系二五河川の天然記念物指定河川がある。

そのひとつ一の坂川は、城下町山口の中心部を流れる川で、下流部約3km区間で河川改修工事が実施されているが、そのうち上流部一・1km区間については、ホタルを守れという住民運動がおきたため、ホタル工法が採用されている。そして毎年五月下旬から六月上旬にかけて、ホタルの乱舞をみることができる。

今年の六月、山口を訪れてみて、市街地の真中でホタルが飛び交う光景に胸踊らせただけでなく、同じ川でも改修のやり方でこんなにも違うものかと感心した(写真1)。

一方、同じ山口市内にある榎野川と吉敷川のホタル工法も見たが、いずれもコンクリートブロックに工夫はこらしてはあるものの草が枯れていたり、川の水が

写真-1 山口県一の坂川上流部のホタル工法



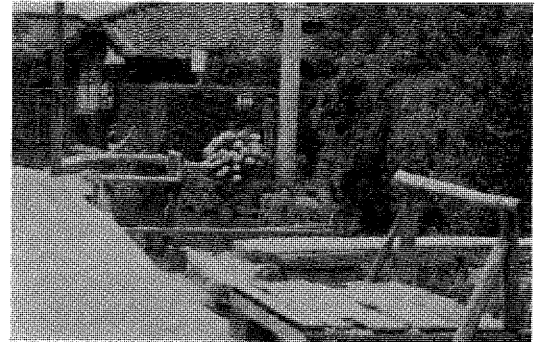
流れていかなかったり、ホタルどころではなかった。単なる環境護岸という土木技術的発想だけではだめなんだという思いを強くした。

### ② 水を生活の中にとりこむ——京都明神川、萩市監場川、津和野の堀

横浜に生活していると、川の水を生活の中にとりこむということは考えにくい。川というものは、雨水や汚水を流す所だと考えるのが一般的であろう。

しかし、京都の明神川や萩市の歴史的環境保存地区に指定されている監場川(写真2)、津和野の殿町通りにある堀な

写真-2 萩市監場川 木の縁台は夕涼みの場になる

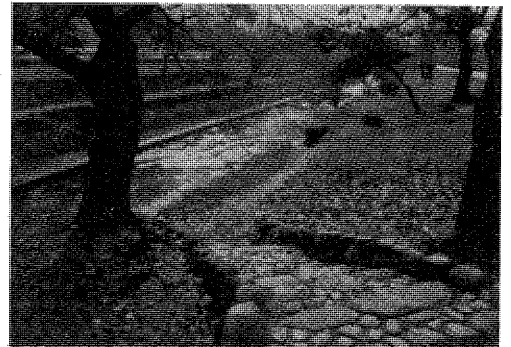


どには排水は流していない。逆に、川の水を庭にひきこんで池の水として利用したり、洗い水として利用したりしているのである。堀を泳ぐ鯉が、家々の池を出たり入ったり回遊している光景は、何とも新鮮であった。

### ③ 都市のシンボルとしての川——広島太田川、西の宮夙川、仙台広瀬川、盛岡中津川

京都の鴨川に代表されるように、日本の美しい都市の多くには「母なる川」というものがある。都市の中を流れるこれらの川は、その街並みをグッと生き生き

写真-3 西の宮夙川 河岸に桜と松の並木が続く



としたものになっているし、訪れる者の心をなごませてくれる。

広島市の太田川はそのひとつである。人口のほとんどが集中するデルタ地帯を流れる六本の太田川(派流)は、この街を大変美しいものになっている。広島市では、川の存在が都市美のポイントになっているとして、いくつかの都市美関連事業に着手していることである。

西の宮の夙川(写真3)も、水はそれ程きれいではないが、河岸が夙川公園として管理され、春には、多くの人々が桜の花を楽しみに訪れ、にぎわいを見せる。仙台の広瀬川は「広瀬川の清流を守る条例」が施行され、都市の中の川としては、驚く程自然の残された川である。

盛岡市の中央を東西に流れる中津川も美しい川である。中の橋下流はコンクリートで囲める護岸改修がされてしまったが、住民運動がおこり、上流は自然石の護岸となっている。「美しい町子供会議」など子供たちによるユニークな運動もあって、この中津川にはゴミひとつ見られない。近年ではサケが産卵のため姿を見せるようになったとのことである。

こうして、いくつかの「母なる川」を歩いてみると、川を大切にする市民や行政のとりくみがあり、川が市民の心の中に深く根ざしていることが感じられる。

これらの川には、人と川を隔絶する無粋なフェンスなどない。あっても腰かけられる程度のものである。

川は、今でも市民に親しまれ続けているのである。

#### ④ 水と親しむ——岡山西川緑道、世田ヶ谷区次太夫堀公園、江戸川区親水公園計画

水辺の回復、創造の事例をいくつか紹介したい。

親水公園づくりのはしりとなったのは江戸川区の古川である。江戸川区では、公共下水道整備後の中小河川の跡地利用として、一二河川について「親水公園計画」がたてられ、(財)江戸川区環境事業促進事業団によって事業が進められてい

る。既に親水公園として整備された古川では、夏には子供たちが水遊びをしたりして大変な賑わいを見せている。

古川のこうした試みは、川を埋めずに水辺を残したという点で画期的なものであるが、あくまでも川の跡地の利用であって、その重きは公園におかれており、柳川市のように生きた川として再生をはかったものではないということは考える必要がある。

一方、世田ヶ谷区では、かつて農業用水として利用されてきた次太夫堀を復活させ、半ば埋まっていた次太夫堀に今、せせらぎが復活している。この事業の特徴のひとつは、単に川だけの復活だけでなく、周辺の用地買収も行って、かつての農村風景を再現する公園計画として実施されていることである。ふたつには、次太夫堀の水源として、野川の水を土壌浄化法によって処理して流している点である。

もうひとつ、世田ヶ谷区で紹介してきたのは等々力溪谷である。この溪谷の水は大変汚れているが、ここを歩くととても都会の真中に居ると思えない程隔絶した溪谷美を味わうことができる。

水辺に親しめる施策としては、単に手を加えるだけでなく、こうして、その川の自然を保全するということが大切だろ

う。

岡山市では、西川用水沿いの市道の幅を縮小して緑道が整備され、花壇広場や水上テラスなどがあって、市民の憩いの広場として親しまれている。モダンなモジュールという感じである。

以上、他都市の川の紹介と私なりの感想めいたことを書いてみた。

他都市の川を歩いて強く思うことは、川の問題は、工学的な問題だけでなく、もっと社会的なもの、人々の心や生活との関わりでとらえなおす必要があるのではないかということである。

### 三——横浜の川——リバーズスケープ

横浜の川というイメージが強いようである。確かに横浜の川は、一見「絶望的」でさえある。

しかし、それは、横浜の川のひとつの側面ではあるが、全てを言い表したものであるのではない。

横浜の川の源流には、ここが横浜かと思わせるような谷戸の農村風景があり、ホタルの飛び交う小川のせせらぎがあるし、帷子川や中堀川、独川などの中上流域には、変化のある流れや滝があり、私たちの目を楽しませてくれる。横浜の都市形成に大きな役割を果たしてきた帷子川

写真—4 梅田川 魚とりする子供たち



や大岡川、入江川派川など、運河の水面の広がりもまた、十分魅力的である。そして、子供たちはといえば、高い柵を乗り越え、護岸を伝い降りて、ザリがにや魚をとるなどして結構楽しそうである(写真4)。

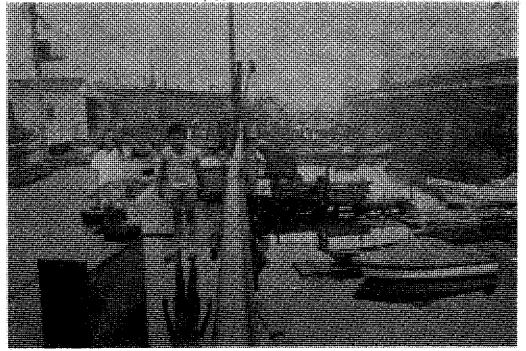
横浜の川は、汚れてはしまったけれど、まだまだいろんな表情を見せてくれるのである。

横浜の川の再生のキーワードとなるいくつかを「リバーズスケープ」として紹介したい。

#### ⑤ みなと横浜の象徴としての運河

横浜のリバーズスケープとして第一にあげたいのは運河である。それは、横浜の横浜らしさは、何といっても港とこの運

写真一5 入江川派川子安浜の町並みと運河は下町の風情がある



河にあるからである。

今、これらの運河は、港の陰に追いやられ、水は汚れ、舟運はトラック輸送に駆逐されてしまったが、それでも河口部には、ダルマ船やタグボートが行き交い、港の風情を感じることが出来る。

埋立てによって、市民から海が遠ざけられてしまった今日、運河は、市民と海をつなげるキーポイントになるのではないかと思う。

そして、小河川が多い横浜にあって、運河はその空間の広がりや豊富な水量によって、他の川にはない多くの可能性を秘めているといえるし、林立するビル群と車がひしめきあう都心部にあって、運河は、唯一連続した空間であり、その存

写真一6 帷子川右支川 自然の流れをとどめている



在だけで精神的安らぎを与えてくれる。運河は、横浜のまちづくりの重要な要素ではないかと思う。

② 自然が残された川

自然の川には、蛇行した流れや、瀬や淵、中洲、滝など自然の造形美ともいえるべき様々な表情がある。

狹川や宇田川、帷子川、中堀川などの中・上流部を歩くと、一部ではあるが、こうした変化のある自然の流れに出会うことができる。

河川のコンクリート化が進み、その個性と川らしさが失われていく中で、こうした手つかずの自然の流れは貴重である。

河川改修をすすめるにしても、できるだけこうした自然は残したいものである。

③ 源流域―谷戸景観と小川のせせらぎ  
市内河川を源流までたどると、大きく分けて三つの景観が見られる。  
ひとつは、狹川や大岡川の源流で、水の流れが深い谷をきざみ、周囲が山林におおわれている。

一方、奈良川や梅田川、

寺家川などの源流は深い谷はつくらず、両側を水田に囲まれ、単純ではあるが、魅力ある谷戸田の農村風景をとどめているのが特徴である。

また、相沢川や帷子川（瀬谷通信隊付近）の源流部は、比較的平坦な台地にあ

り、ささぎるものない台地景観は、訪れる者の気持を晴れやかなものにしてくれる。  
こうした、市内河川の源流部は、いずれも水量はそれ程多くはないが、かつての農村風景をとどめており、横浜に残された緑の拠点として、また、川の維持水量の確保という点からも重要な場所だといえるだろう。

四―横浜の川の再生に向けて

① 川を意識し、川とつきあう

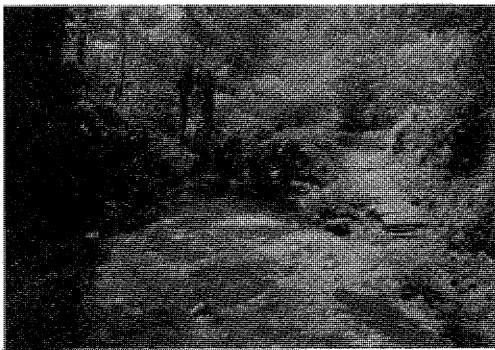
大岡川の downstream では、十一月に、町内会の人々によってハゼ釣り大会が行われている。そして、今年の十月、横浜で初めてのカヌーフェスティバルが催され、大変な反響を呼んだ。

柏尾川でも、戸塚観光協会が、桜祭りや灯籠流しをしている。

横浜の川がこんなにも汚れ、排水路となってしまったのは、川と人とのつながりが疎遠になったからである。生活に必要な水は、相模湖から送られてくる水道に変わり、蛇口を通じてしか水を意識することがなくなったし、泳ぎもプールに行けばいいことになった。

都市河川の再生の第一歩は、私たち自身が新しい形で川とのつきあいを開始することから始まるのではないかと思う。

写真一7 待従川源流



## ② 横浜における川の復権

これまで、横浜の川は、治水の対象あるいは排水路として意識されても、市民の生活環境やまちづくりのテーマとしては、ほとんど意識されてこなかったのではないか。

今一度、横浜における川の位置づけをとらえ直す必要がある。

## ⑦ 普通河川の復活

本市においては、川の末端部（法河川と準用河川以外の普通河川や水路敷）は昭和四十八年下水道条例の制定によって、下水道として管理することになっている。横浜の川は、その出発点から、すでに排水路として扱われているといえよう。

これは、河川と下水道の分担基準を示した建設省の局長通達を基にして定められたものであるが、この基準の適用範囲は市街化区域内の普通河川であり、市街化調整区域はこの限りではない。しかも市街化区域内であっても、「利水機能を有するもの」や「都市環境保全上清流と緑の空間として必要なもの」などは河川として管理できるとしているのである。

川は、自然水を供給する源流があっはじめて川だといえる。源流のない川は川ではない。

市内にある沢山の普通河川や水路敷の多くは、川の維持水量の確保という点

で、極めて重要な位置にある。そして、都市化の進行によって、自然水の供給が困難になっている中で、こうした普通河川や水路の果す役割は、むしろ高まっているといえよう。

そういう意味で、従来の河川と下水道の分担区分を見直すべきときが来ているといえる。

## ④ 川をまちづくりに生かす

横浜の川とりわけ、ビル群と道路にその空間を占拠された都心部において、連続した空間としての川は、その存在だけで、市民の精神生活に安らぎと潤いをもたらす。しかも川はただの空間ではない。公園や噴水などでは代替できない水の空間としての素晴らしさがある。

水は汚れてはいいても、その水面には青い空や建物、人々の姿を映しだし、朝夕のほんのわずかの時間に反射する光は、市民の日常生活に、変化のある風景といったものを与えてくれる。

川はまた、人と人とのふれあいを生み出す広場をも提供してくれる。長崎中島川祭りや大阪中の島祭りには、一〇万人〜三〇万人もの人々が集い、「我が町長崎」「我が町大阪」の思いを強くする。

川が、長い歴史を通じて人々の生活と深いかかわりをもち、地域の文化の形成に重要な役割を果たしてきたからこそ、川で集うことの意味がある。我が町を流れ

る川を通じて、新しい人と人との結合、地域の文化をはぐくむというまちづくりにとってのもうひとつの意義があるといえないか。

横浜のまちづくりの中に川をきちんと位置づけることが今必要とされている。

## ③ 川の個性を生かした河川改修

河川環境という点については、二つのことを考える必要があると思う。

ひとつは、川の社会的環境ということである。川と人との関わり方は、人間の生活様式に規定されるものである。だから、何もかも昔の自然な川に戻せということにはならない。新しい社会的環境のもとで、川と人との新しいかかわり方が生まれるような河川環境を考えよう。ことである。それは川によってもちがうし、同じ川であっても、場所場所によってもちがってくるだろう。いずれにしても、人々が水にふれてみたくなるようなそして、水辺にふれやすい川をつくる必要があるであろう。

もうひとつは、川の自然的環境ということである。かつての川は、水はきれいで、瀬や洄があり、緑におおわれ、魚が生き続けることのできる、川としての自然的環境を備えていた。これまで河川改修といえば、計画洪水流量から出発して、必要な断面と土木構造物としての安

全性という面から工事をすすめてきたが、河川は下水道のような土木構造物ではないのである。川が本来備えていた自然的環境をとり戻すこと、そういう自然の川から出発して、それぞれの河川の自然的環境や個性を生かしたやり方考える必要がある。

## 五 河川環境向上のための具体的検討課題

横浜の河川環境を向上させるためになんか、私なりに考えていることをいくつかあげてみたい。

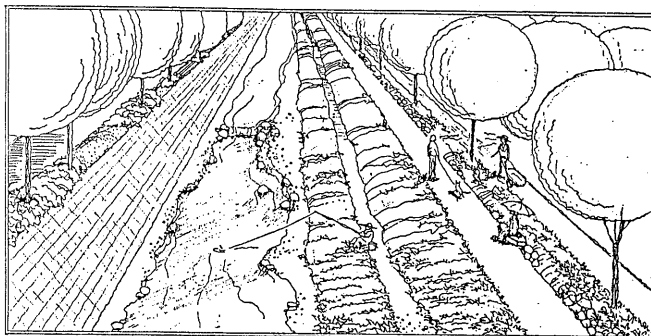
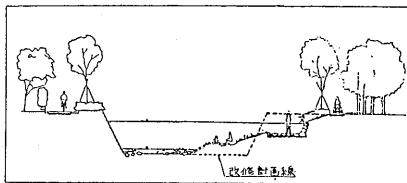
### ① 河道形態の親水化

現在すすめている河川改修では、計画洪水流量を満足する容量としての河道形態しか考えていないが、平常流量に対する配慮とともに、瀬や洄、中洲など自然の流れがもっている要素を組み入れた河道形態、生物の生息にとって好ましい河道形態について配慮する必要がある。そして、一〜二mもある落差工は避けて、数十cmの小滝をたくさん配置して、エアレーション効果を上げたり、洄をつくって沈澱効果をあげるなど、川の自浄作用を向上させる配慮もやろうと思えばできることである（この点については、今年

図一 河道形態の親水化

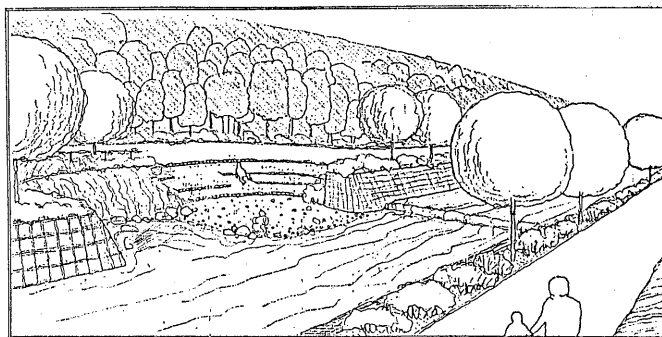
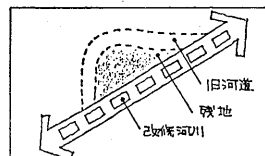
**A 片側の管理用通路を高水敷として利用**

通常の河川改修では兩岸に3m以上の河川管理用通路を設けている。片側の通路を高水敷として利用することにより、片側の護岸をソフトなものにし、水に親しみ易い形態にすることができる。



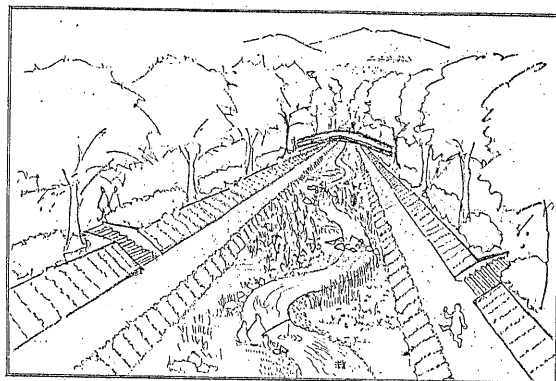
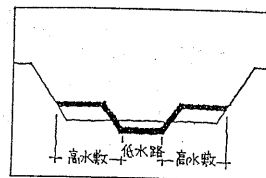
**B ポケット的な親水化**

河川改修によって廃川敷が生ずる場合、廃川敷と残地を含めたポケット的な親水化をはかる。



**C 低水路による親水化**

平常時の水の流れに対して低水路を設ける。低水路は蛇行させ、瀬や洲、小滝などを設け、景観変化とエアレーション効果による水質改善、魚など小動物の生息場所とする。高水敷は市民の散策空間としたい。



度、既に改修が完了している独川の一区間で、工事を実施する予定である)。更に、人々が水辺に近づき易い形態の工夫が必要であろう。この点については、安全性の面から危惧する意見がでるであろうが、もともと川は、一定の危険性を内在しているものである。絶対安全な川などというものはありえないのであって、最低限の安全性に対する配慮は必要であっても、動物園のオリの中に動物を閉じこめてしまうようなやり方は少く

ともさけるべきだと考える。もし、そうでないなら、多摩川の高水敷など、高いフェンスで囲ってしまいか、高水敷を利用すること自体を禁止しなければならぬだろう。安全性との関係で検討しなければならぬ点に柵の問題がある。今、横浜では高さが一・二mもある柵を設置しているが、少くとも、高さがこれでもいいかどうか検討する必要があるだろう。この高さは、自転車道路の柵の基準らしいが、以前は

八〇cm程度の柵を設置してきており、ここ数年の間にそれが一mになり、一・二mになってしまった。この背景には、川の事故に対する管理瑕疵裁判が影響しているのは確かであるが、管理責任を問われた判例でも、柵の高さをこれだけにしなければならないというところで言及していないはずである。建設省の基準でも柵の設置や高さについてこうしろというものはない。これまで、市民から八〇cmじゃ低すぎ

る。高くしろという意見があったということは、私自身耳にしていないが、これは市民のコンセンサスというよりむしろ、管理瑕疵に対する役所の自己防衛的視点から、だんだん高くなってきたのではないかと思う。

柵の問題については、河川環境と安全性の面から、今一度検討する必要がある。

## ② 魅力ある街づくりの一環としての拠点整備

大河川の場合は、高水敷の利用を中心とした環境整備をすることができるが、横浜のように高水敷をもたない中小河川にあつてはそれはのぞめない。したがつて、中小河川については、河川沿いに空地を確保することが必要であろう。

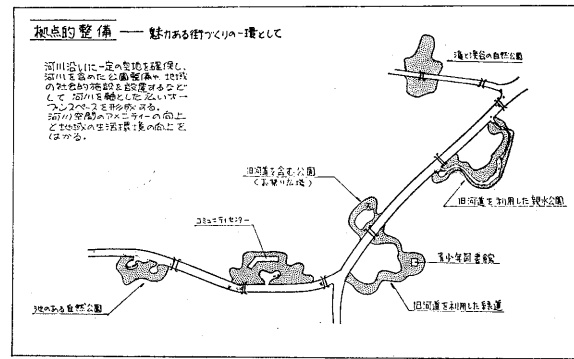
河川を軸として、拠点的に空地を確保し、公園やグラウンド、地区センター、図書館など地域の社会的施設を配置する。そのことによつて、河川空間の広がりができ、河川のアメニティの向上を図るとともに、水と緑のネットワークで結ばれた魅力ある地域づくりができるのではないかとと思う。用地の確保という点でも、経済的なメリットがないだろうか(図2)。

## ③ 運河のアメニティの向上

本市では、大岡川プロムナードが事業化され、柏尾川プロムナードの検討もすすめられているが、今後は遊歩道だけでなく、川自体の親水化という点にふみこんでいきたいものである。

これは、管理者である神奈川県との調整が必要であり、簡単にはすすまないで

図-2 拠点整備—魅力あるまちづくりの一環として



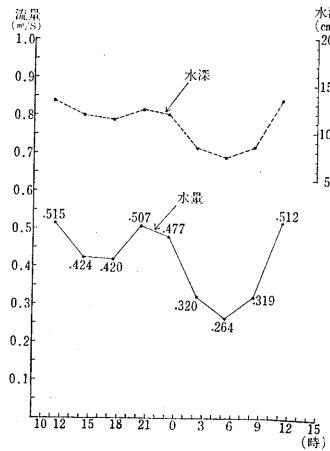
あろうが横浜市自身の問題として、今後積極的にとりくんでいく必要がある。

## ④ 河川水の浄化と維持水量の確保

水辺に親しみ易い河川改修をいくらすすめても、水の汚れの問題は残る。下水道整備にはかなりの年数を要するし、仮に下水道が整備されても、本市における川の水質目標の達成は難しいと思われる。

現在、建設省では、礫間浄化法による河川水の直接浄化にのりだしているが、こうした河川水の直接浄化や、河川の自浄作用の向上のための研究もすすめる必

図-3 河川水量変動パターン  
早瀬川(中荏橋下流)観測月日  
1981 10.31~11.1



要がある。

今ひとつの問題は、河川の維持水量の確保という点で、これが一番大きな問題である。

昨年暮れに、市内河川の四〇地点で、河川水の平常水量の二四時間観測を実施した(観測は三時間間隔)。これによると、河川水の時間変動が都市における水利用形態に類似する傾向を示しており、最も人間活動の少ない午前五時前後に、河川水は最小となることがわかる(図-3)。

また観測結果からみると、多くの河川で、平常水量の最小値は最大値の約半分程度である(図-4)。もし、下水道整備がすすめば、河川の平常水量は半減し、更に開発による不浸透域の拡大によつて、一層減少することになると思われる。河川水の絶対量が多いのならまだしも、極めて少いのであるから、やっかいな問

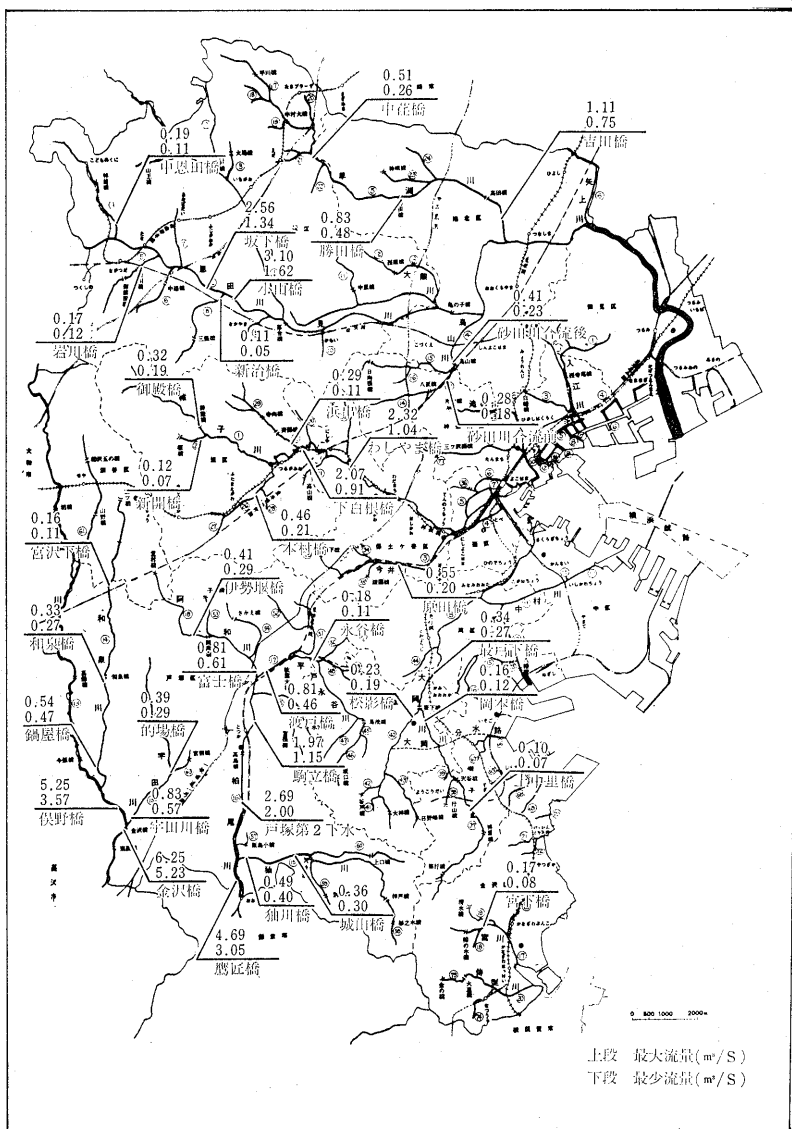
題である。

住宅公園などで進めている雨水の地下浸透或いは市内に現存する溜池の保全と利用(名古屋市では溜池の利用の事業を実施している)、保水池の設置や遊水池の利用など、川の維持水量確保のための積極的なとりくみを

開始する必要があるだろう。更に、下水道に関連して、その処理水は、市内の水ではなく、相模湖からひいている水であるから、河川水の減少とは直接関係がないという意見がある。確かにその通りではあるが、自然水が減少し、生活系と産業系の排水が、その半分を占めているという現状では、下水道についても、水の循環という点からみると、今のように集中させるやり方はどうだろうか。治水についても総合治水ということがいわれているように、下水道についても、水のサイクルという面から考えてみる必要があると思われる。

現在の下水道の処理は、河川水による希釈を前提としており、河川の水量とは無関係ではない。その点で、団地のコミユニティプラントなどは生かせないものが。東京都で、浸透雨水樹による地下浸

図一 4 市内河川平常流量 (1982. 10~11)



透の実験的施工をしているように、少くとも雨水の地下浸透については検討する必要があると思われる。

六 おわりに

今年の十月、相鉄ジョイナスで、西区

の町内会主催の「小さな目がとらえた帷子川」展が開催され、子供たちの作文や絵が展示された。これらの作文や絵を見

ると、ほとんどが帷子川がきれいになって、魚釣りや水遊びができるようになることをのぞんでいる子供たちの気持ちが伝わってくる。

環境庁が昨年実施した環境モニターアンケートによっても、都市河川を暗渠化し、道路や駐車場にしたり、公園や緑道をつくることに対して「安易に暗渠化しないで、まず川をきれいにし、できるだけ川を残すよう努力すべきだ」と答えた人が約七割に達している。都市河川の再生は、子供たちや市民の切実な願いだといえるだろう。

本市の「よこはま21世紀プラン」ではじめて「河川環境」をはっきり打ち出し、そのための模策が始まったばかりである。今後、市民や学識者を含めた検討を行い、横浜の川の位置づけや、再生のための戦略といったものを策定する必要があると考えている。また、都市河川の再生には、河川部局(土木)だけでなく、水質部局や都市計画部局、区など、横断的なとりくみが必要であり、管理者である国や県との協調も必要であろう。

河川計画係

〈下水道局河川部河川工事課